



蔵書と書棚でゴルフスタイルを垣間見る

# ゴルフ好きなあの人 の書齋

仕事をする、読書をする、文章を書く……。書齋は誰にも邪魔されない自分だけの空間。文化人たちの、そこから見えるのはどんなゴルフライフなのでしょう。

取材・文/山田亜子 写真/三木崇徳、村上悦子、広安省吾

## 須磨久善

Hisayosi Suma

心臓外科医の書齋

すま・ひさよし 1950年兵庫県生まれ。日本を代表する心臓外科医。須磨スクエアクリニック院長。講演など多方面で活躍している。ゴルフ歴30年。ベストスコア75。



かなり処分をしたなかで残ったのはレッドベターの著書2冊と夏坂健の「昭和天皇のバター」。



## 60歳で行きついたのは“移動書齋”



気になる所には付箋が張られ、アンダーラインが引かれ、自分なりのイラストやメモ書きも入っている。

「書齋ってね、世代ごとに変わっていくものですよ」。須磨久善さんは世界各国で5000例を超える心臓手術を執刀し、日本で初めて心臓バチスタ手術を成功させた心臓外科医。「40〜50代は論文を書いたり、調べ物をしたり、と籠って仕事をする書齋。でも、60代は違います。本はソファーに寝転がって読む（笑）。もともと整理魔というほど、机の上はもちろん、周りが雑然としているのは苦手。ここは明るく清潔感いっぱい、愛犬・こころちゃんも須磨さんの横で安心してくつろげる空間だ。

「僕は子供の頃から本が大好き。夜勤の時は必ず4、5冊は持っていたし」。そんな、須磨さんが25年間手放せない本がある。レッドベター著『アスレチックスウィングの完成』。

「もう何百回読んだかなあ。ゴルフから戻ると、今日はここが駄目だった、次はこつちも気を付けてみよう……ってね」。いつも車に積んで、旅行やゴルフのお供しているそう。ここまで大切に読んでもらえる本も幸せだ。